

塩原佳典著

『名望家と「開化」の時代

——地域秩序の再編と学校教育——

(プリミエ・コレクション 42)

京都大学学術出版会 二〇一四・三刊

A5 三七四頁

四二〇〇円

本書は、幕末維新期の信濃国松本藩（筑摩県、長野県）地域において、地域秩序の再編に対応した名望家層を論じた研究書である。近世期以来の身分的中間層としての営為を失いつつある名望家層が、藩府県と村の中間に位置する地域という場で、複合的な「開化」の媒介者として果たした役割を考察する。

行論の軸となるのは、各々固有な立場から近代学校設立に関与した三人の名望家——大町組大庄屋本家出身、戸長、博覧会・新聞誌世話掛、学区取締ら諸事業を兼担した栗林球三、成相組大庄屋分家出身の地方文化人として成新学校変則科を運営した藤森寿平、松本下横田町の名主兼商人の立場から『信飛新聞』発行など多事業に進出した市川量造——である。

近世後期の松本藩地域の村役人層は、家訓書や由緒の実践により掌握した知・情報を村落内部へ媒介することで、「イエ・ムラの教育」を保持し身分・家格・村落秩序を再生産していた（第一章）。維新変革はその秩序を解体しつつ、藩と在地社会との媒介者として地域秩序再編Ⅱ「開化」を担う諸主体を創出した。松本藩の議

事機関である議事下局では、在方・町方から選出された議事局出役が、地域の利害関係を反映した「公論」を定立する役割を担った（第二章）。先述した栗林、藤森、市川らのように、近世期からの連続と断絶に直面した多様な主体による学事への関与は、相互補完的な「開化」の主導権争いの様相を呈した（第三章）。

続いて、学校・新聞・博覧会といった「開化」の諸事業の相互連関が問われる。近代学校は、地域住民への新聞・布告の講義や博覧会の開催される「開化」の媒体であると同時に、教育内容が新聞報道され博覧会で展示される「開化」の情報ともなる、まさしく「開化」のメディアであった（第四章）。松本城を主会場に「古器物」を展示した筑摩県下博覧会は、附博覧会として芝居などの民衆娯楽を伴うことで、地域住民へ「開化」を実感的に伝え地域秩序を再編した（第五章）。

だが、学制から教育令に公教育制度が変わり、民権運動の展開した明治一〇年代に、未分化の「開化」と近代教育政策のずれが顕在化する。市川が設立に携わり新聞で後援した民権結社奨匡社と学校奨匡義塾は、教育と政治的实践の区別、松本中心主義という特質を持ったため、政治的实践を含む藤森の教育実践や、地域の殖産を担う職業学校を求めた栗林の構想とは相容れない（第六章）。一方、成新学校変則科出身で奨匡社の民権家松沢求策は、未分化な名望家層「天保人民」と自己を弁別し、加助騒動を「民権鑑」と読み替え、政治に特化した民権思想の媒介者として地域に向き合う（第七章）。「独占性の解体」に対応した「開化」の名望家層の役割は、「領域横断性の分節化」した「地方名望家体制」に特化さ

れた(終章)。

巻末には「筑摩県管轄物価表」、事項・地名・人名索引を載せる。豊富な史料群を活かし、学校教育に集約されない地域の「開化」に内在的に迫った点に特色があろう。

(佐藤大悟)